

産業遺産紹介 IH-CSIH-074

名古屋港西部木材港の水中貯木場

所在地：愛知県海部郡飛島村～愛知県弥富市

名古屋港の西部木材港は1968（昭和43）年に国内最大の水中貯木場として開設された。発端は1959（昭和34）年の伊勢湾台風の被災であった。当時市街地に近い数か所の大規模水中貯木場から木材が流出して、被害をより増幅させたことが大きな理由であった。

名古屋港管理組合では、この被災を契機に港外（現在の弥富市と飛島村）への貯木場建設に踏み切った。同時に堀川沿いに集中していた木材業者の移転を視野に入れた木材工業団地も貯木場周辺に建設した。1963年に着工され、1968年に開設された第1～第7水面をもつ



【写真1】西部木材港の第2貯木場（飛島村西浜、2022/11/9撮影）

貯木場と木材整理場（水面）を含めた総面積は263万㎡という大規模なものであった。

しかし1973年当時輸入された原木が約378トンであったものが、2021年には僅か6.2トンと激減し（コンテナによる製材品輸入は445トン）、水中貯木場の役割を終えようとしている。第7貯木場はすでに埋め立てられ、第2貯木場も半分ほどが埋め立てとなっている（2007年現在194万㎡）。

だが、原木は今も西部木材港で降ろされている。月1回程度と言われるが、木材船からクレーンで海上に降ろし、筏師が海上で筏に組んで第2貯木場まで運んでいる。

名古屋港に限らず水中貯木場は全国的にもその数を減らしている。名古屋港の西部木材港では貯木場に浮かぶ原木の数こそ少なくなったが、今も水中貯木場が働く姿を見ることができる。稼働遺産の一つでもある。（文・写真：天野武弘）



【写真2】貯木場運用最盛期頃となる 1987-90年の西部木材港の貯木状況（国土地理院地図航空写真より）

中部産遺研会報 第97号 目次

1. 産業遺産紹介／天野武弘	1
2. 人造石の産業遺産を歩く(21)浦賀ドックと周辺の人造石遺産／天野武弘	2
3. 第185回定例研究会の概要／大島一朗	7
4. 第19回パネル展と講演会「大正ロマン、昭和レトロのモノがたり」／渡辺治男	9
5. 『産業遺産研究』第32号の原稿募集／石田正治	10
6. 第186回、第187回定例研究会の案内／夏目勝之	10
7. 木曾川大井発電所・旧北恵那鉄道廃線跡見学会の案内／浅野伸一	11
8. 研究会費振込依頼、編集後記、原稿募集	11

人造石の産業遺産を歩く(21)：服部長七の人造石工法(長七たたき) ー全国に点在する人造石遺産ー
浦賀ドックと周辺の人造石遺産

Artificial Stones by Hattori Choshichi and Method of Construction:

(21) Artificial Stone Structures as Industrial Heritage, Uraga Dock and Surrounding Artificial Heritage

天野武弘 / AMANO, Takehiro

Key Words ; Artificial Stones, Choshichi-Tataki, Hattori Choshichi, Industrial Heritage, Uraga Dock

1. はじめに

浦賀ドックのある浦賀の現地調査を思い立ったのは、服部長七の歴史文書にあるこの地区に関わる人造石工場の記録からであった。以前から調査対象にしながら延び延びになっていたが、きっかけは学会の研究者からであった。この研究者と一緒に浦賀ドックを所有する横須賀市の文化財係及び住友重機械工業(1969年にドックを建設した旧浦賀船渠と合併)の担当者の案内で訪問できたのは2021年7月であった(ドックは2021年3月に住友重機械工業から横須賀市に寄付)。ドック底まで降りて拝見できたときは、煉瓦造ドックの壮大さに目を見張った。ここは日本で2例しかない煉瓦ドックの一つである。

気になったのは煉瓦の目地材であった。漆喰モルタルあるいはたたきのようにも感じ、成分分析に掛けるため許可を得て渠頭部階段から少量を採取した。



写真1 浦賀ドックの渠頭部分(2021.7.21筆者撮影)

ドック周りの海岸端の調査も行った。目的は後述する歴史文書にある人造石遺産の探査である。見回るうちにドック脇の護岸が人造石工法の様相を示すのに気がついた。ちょうど海辺に降りる階段があり、護岸石積み目地材からも許可を得て試料採取ができた。試料分析結果からの考察は学会発表(文献1)しているので、ここでは簡潔に述べるに留める。



写真2 浦賀ドックの俯瞰(渠口方面を見る)(2021.7.21筆者撮影)

さらに浦賀湾周囲の海岸線を案内頂き人造石遺産の探査を行った。一部にその可能性ある護岸もあったが、明確に判断するまでに至らなかった。また浦賀ドックから1.2kmほど南方の海岸沿いにある旧川間ドック(人造石遺産存在の可能性もある日本最初の煉瓦造ドック、現在は旧ドックほかを利用したマリーナ)も調査したいと思ったが、この時は事前連絡してなく、次の機会に譲ることにした。



図1 浦賀ドックが所在する三浦半島(国土地理院地図に加筆)

2. 浦賀ドックとは

(1) 浦賀ドックの歴史概要

浦賀といえば、歴史上に名高いペリー来航の地を思い浮かべるであろう。ただドック建設場所は、そこから2.5kmほど北にある細長い浦賀湾の奥まったところである。京成浦賀駅から500mほど南に位置する。いま少し歴史を遡れば、幕末の1853(嘉永6)年にペリー来航を受けて、海防強化策の一環として、浦賀ドック対岸の東浦賀の地に幕府が造船所(浦賀造船所)を設置し、日本初の洋式帆船「鳳凰丸」を建造したところとしても知られる。

浦賀ドック(ドックは船渠とも呼ばれる、種別はドライドック、以下ドックと呼称)は、『浦賀船渠六十年史』(1957年)によれば、1897(明治30)年2月に浦賀船渠(株)(1896年9月創立)によって着工され、1899(明治32)年11月に完成し、1900年1月に開業となっている。

同書にはまた、完成までに苦難の道のりがあったことを記している。当初は、浦賀湾北端の中堀を浚渫してドック建設を計画していたが、地質的な問題から変更され(埋め立てて船台、後に2号ドック)、現在地にドック掘削をしている。また1898年には新造船の大型化に対応するため工事途中にドック全長を拡大して工事が進められた。この頃は、造船業の発展を企図した造船奨励法(1896年)などが公布され、大型船建造の機運が高まっていた時期でもあった。



図2 浦賀ドック及び周辺の様子(国土地理院地図に加筆)

日本でのドック建設は、横須賀製鉄所(造船所)第1号ドック(1971年2月竣工、全長122.5m、日

本最古の石造ドック、現在も米軍、自衛隊共同使用として現役)を皮切りに、浦賀ドックの竣工時までには12箇所が竣工していた。このうちドックの規模としては浦賀ドックは4番目の大きさであった。規模順に見ると以下のようなものである(文献2)。

- ・横浜船渠1号ドック(国重文、日本丸係留)
(全長167.8m、1898年12月竣工、石造)
- ・呉海軍工廠2号ドック(埋立)
(全長158.4m、1898年12月竣工、石造)
- ・横須賀造船所2号ドック(米軍・自衛隊共同使用)
(全長156.4m、1884年6月竣工、石造)
- ・浦賀ドック(2003年閉鎖、現存)
(全長148.4m(1899年11月竣工、煉瓦造)

当時のドック建設ではほとんどが石造であった。しかし1898年11月に完成した東京石川造船所浦賀分工場(1892年8月に浦賀船渠に買収され同社浦賀分工場となる、旧川間ドック)と、翌1999年竣工の浦賀ドックの2箇所のみが煉瓦造であった。両ドックとも閉鎖されたが、世界的にも希少な煉瓦造ドックとして現存している。ただし旧川間ドックの方はゲートが撤去され大部分が海中に沈んでいる。したがってドック全体を俯瞰できるのは浦賀ドックのみである。



写真3 浦賀ドックの煉瓦造はフランス積み(2021.7.21筆者撮影)

なお、浦賀ドックの煉瓦造は日本では数の少ないフランス積みであり、明治中期になってからの巨大なフランス積み構造物としても希少例である。一方旧川間ドックはイギリス積みに似たオランダ積みといわれる。

浦賀ドックでは竣工から2003年のドック閉鎖までに、各種艦船、貨物船、青函連絡船、漁船、第2代日本丸など約1,000隻の建造や修理が行われ、長く日本の造船業の一角を担ったドックとして使命を果たした。

(2) 浦賀ドックの煉瓦

ドックの特徴ともなる煉瓦の調達では、当初は地元に近い久比里（現横須賀市久比里）に煉瓦工場を新設して製造した。しかし品質不良でドックには適さず契約解除。直後の 1898（明治 29）年 5 月に新たに岡田松太郎と契約を結び、ドック側壁と底部用横鼻上等焼過煉瓦 29 万 5000 個、上等焼煉瓦 50 万 5000 個を総額 1 万 232 円 50 銭で購入し、その全部を翌 1899 年 1 月に納入する。続いてドック側壁用の同質煉瓦 50 万個の購入契約もしている（文献 3 より 85 頁）。

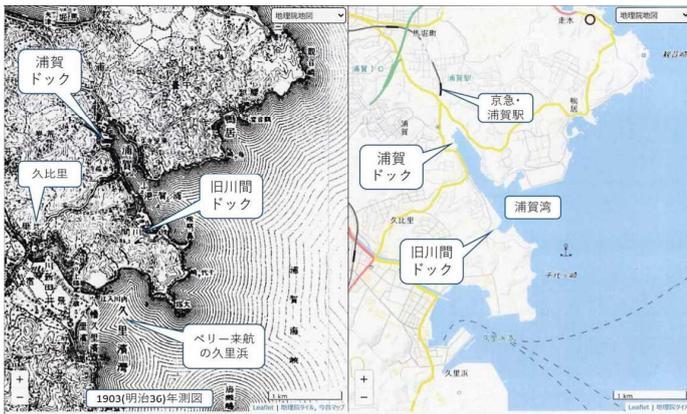


図3 浦賀の変遷(1903年当時と現在)、久比里は当初浦賀ドックの煉瓦焼成地(「今昔マップ on the web」に加筆)

ドック全体で 200 万個以上使用といわれる煉瓦のうち、この時だけで合計 130 万個にもなる煉瓦を契約した岡田松太郎とは、どのような人物だったであろうか。『岡田煉瓦 100 年史』(1997 年、文献 4)によれば、当時松太郎は、現在の愛知県安城市根崎町に居を構えていたが、1894 年頃に煉瓦に適した粘土が根崎の岡田家の土地から出ることを知り、父親の岡田平六や地元有志らと相談して赤煉瓦製造を決めた。翌 1895（明治 28）年 7 月に根崎煉瓦工場（現岡田煉瓦製造所）を設立し、1897（明治 30）年 4 月に根崎煉瓦合資会社を創立する。浦賀ドックとの契約時は同社二代目の社長であった。

また合資会社創立の頃に鉄砲窯を完成させて焼成を開始と同書にあるので、この窯によって量産を可能にしたのであろう。鉄砲窯は煉瓦が 12 万本と 6 万本入る窯を含め三つあり、昭和 30 年頃まで修理しながら使い続けたとのことである（文献 3 の 91 頁、72 頁、116 頁及び 120 頁の年表）

ちなみに、岡田煉瓦は、いずれも愛知県内の赤煉瓦建物として著名な、1898（明治 31）年竣工のカプトビール工場（現半田赤レンガ建物）及び、1904（明治 37）年竣工の日本陶器合名会社（現ノリタ(株)）の旧製土工場（現ノリタケの森の赤煉瓦棟）の煉瓦

も焼成したことが知られている。

3. 服部長七と浦賀との関わり

服部長七の人造石工事は、東京方面では 1876（明治 9）年を皮切りに、大久保利通邸や木戸孝允邸などの邸宅の土間や井戸側、1877 年及び 1881 年の第 1 回及び第 2 回の内国勸業博覧会が行われた上野公園の会場土間や噴水池、当時の宮内省や陸軍兵舎の土間や噴水池など、比較的小規模な工事が主体であった。また 1885（明治 19）年に横浜の下水道工事にも関わっている。この時は 1,624 円の請負額で汚水枡 591 個、雨水枡 348 個を造って工事している（岩津天満宮所蔵文書より）。いずれも長七たたき（人造石の練土のみ）を利用した工事だったと思われる。

こうした長七たたきによる工事は服部長七が西日本各地の築港や干拓堤防などの大工事に足を延ばす足がかりともなった。その拠点として東京日本橋に服部長七率いる服部組の本店を構えていた。そして各地の工事では、その地域に支店を設けて番頭（工事監督者）を配置して工事に当たった。

関東地区での大規模工事としては、知られている工事は少ない。千葉県銚子港、茨城県の中川港（那珂湊港）は見積りのみで終わっている。「東京府海面貯木場新設設計書」の控えも残っているが（岩津天満宮所蔵）、工事された記録は出てこない。こうした中、工事されたものとして次の 2 箇所が僅かに知られる。1896（明治 29）年の三浦郡横須賀海岸埋立工事と、1897（明治 30）年の東京石川島造船所の三浦郡浦賀町防波堤築造工事である。

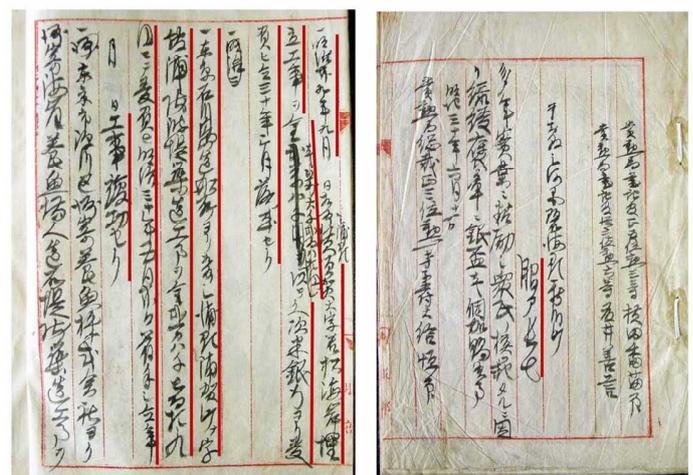


図4 横須賀及び浦賀の人造石工事文書(服部長七の「緑綬褒章」申請下書き(岩津天満宮所蔵文書に加筆)

「1.明治29年9月三浦郡横須賀大字若松海岸埋立工事ヲ金46,280円ヲ以テ久次米銀行ヨリ受負ヒ同30年3月落成セリ」

「1.明治30年 東京都石川島造船所ヨリ相州三浦郡浦賀町大字館浦防波堤築造工事を金28,719円ニテ請負ヒ明治30年5月20日着手シ同年中月 日工事竣功セリ」

この2箇所では、「明治29年9月、横須賀大字若松海岸埋立工事を金4万6,280円で、同30年2月着手」及び、「石川島造船所より、浦賀町館浦防波堤築造工事として金2万8,719円にて請負、明治30年5月20日着手、同年工事竣功」との文書が、明治30年6月に緑綬褒章を賜る際に作成したと思われる履歴文などに書かれている（岩津天満宮蔵「緑綬褒章」申請下書き及び国立公文書館蔵「皇太子婚贈位内申事蹟書」大正13年より）。

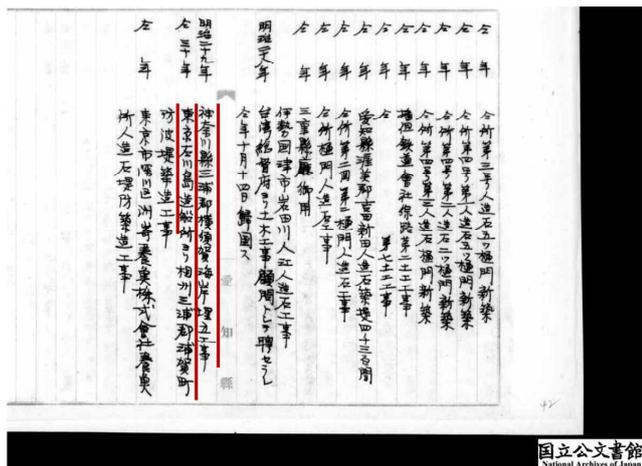


図5 服部長七の工事記録(「皇太子婚贈位内申事蹟書」大正13年より部分、国立公文書館蔵文書に加筆)

前者の横須賀大字若松海岸埋立工事の方は、現在は埋め立てられて市街地（横須賀市若松町辺り）となっていて（当時の埋立地護岸が現国道16線沿い）、工事された面影もない。

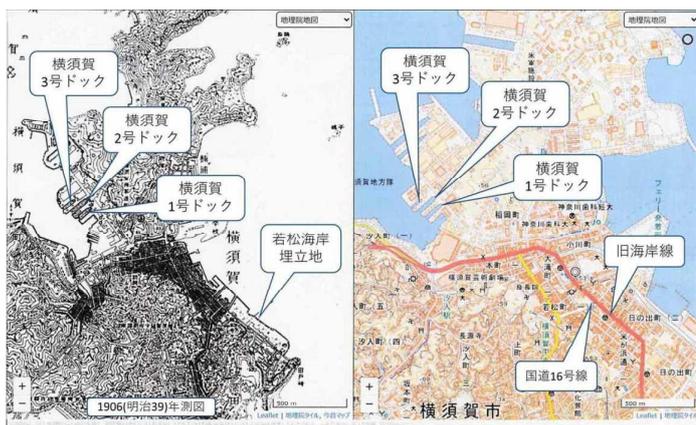


図6 横須賀の若松海岸埋立地の様子(1906年当時と現在) (「今昔マップ on the web」に加筆)

後者の浦賀町館浦防波堤築造工事の方は、石川造船所及び館裏（現横須賀市西浦賀）とあるので、先に述べた旧川間ドックを指しているのは間違いないであろう。旧川間ドックの現地調査報告が望まれるが、またの機会としたい。

では浦賀ドックの方かというと、服部長七や人造石工事に関する明確な記録文書は、今のところ見つ

かっていない。しかしドックに隣接する護岸は、述べたように蛍光X線分析結果から明確に人造石工法との判定がなされている。

こうしたことを鑑みれば、1900年半ば頃までの大規模な人造石工事では服部長七の服部組以外は皆無であること及び、ほぼ同時期に近隣の若松海岸の人造石護岸工事や旧川間ドックの防波堤工事を行っていることから、ここも合わせて工事したとも考えられる。小規模な工事であれば服部組の工事記録に残らない場合があり（岩津天満宮所蔵の服部長七に関する文書）、その範疇に入る工事だったかもしれない。あるいは後の修理工事とも考えられる。

4. 浦賀ドック及び周辺の人造石遺産

今調査の目的とした浦賀の人造石護岸については、ドック北に隣接する旧ポンプ室脇の護岸が、延長約20m前後が人造石石垣の様相を示していた。採取した練土の蛍光X線分析結果は文献1で発表しているが、概要を述べれば、人造石の主要原料となる消石灰と種土の配合比は1:2.5となった。またドック渠頭



図7 浦賀ドック及び周辺の人造石護岸の様子(国土地理院地図に加筆)

の煉瓦の目地から採取した試料の同配合比は1:3.1であった（文献1）。いずれも服部長七が浦賀ドックと同時期に行った愛知県内の人造石配合比1:5.6~7.7（文献5）と比べると、かなり消石灰の多い配合



写真4 浦賀ドック脇の人造石護岸、階段付近の護岸壁面から人造石試料を採取(2021.7.21筆者撮影)

割合である。消石灰の配合割合を多くして強度を高めたものと推測された。

また人造石の原料配合比では、種土の産地すなわち種土の性状に左右されることが知られている。愛知県をはじめ西日本で広く用いられた真砂土（花崗岩の風化土）が採れない関東では、別の種類の種土を使った可能性があり、その種土の性状から配合比を決めたとも考えられる。

こうした人造石に相応しい種土が十分に得られなかったことが、東京をはじめ関東以北での施工例の少なさに繋がったと思われる。なお東京での長七たたきによる土間などの小規模な工事では、原料となる真砂土を三河から運んでいた。その船便の記録が一部であるが残っている。

いずれにしても関東での人造石工事が少なく、目地練土を採取できたのは現状浦賀と服部長七時代より早い施工時期となる高輪築堤跡（文献 5、消石灰と種土の配合比は 1 : 2.3 ~ 7.0）の 2 箇所しかない。当地域での別の人造石遺産の調査に待たざるを得ないが、この点からも旧川間ドックの調査が望まれるところである。

一方、ドック渠頭部の目地の練土については、消石灰の高い配合量から、人造石ではなく漆喰モルタルの可能性もある。煉瓦目地では 1890 年代になると、より接着力の高いセメントモルタルが使われるようになるが、セメントは当時まだ高価であり漆喰モルタルも広く使われていた。浦賀ドックでは構造材として煉瓦のほか、セメントを使用したことが現存ドックからも窺えるが、そのセメントは全て輸入品であった（文献 3）。

浦賀ドック以外に目を移すと、浦賀湾を挟んだドック対岸の護岸も人造石の様相を示している。割石



写真5 人造石の可能性を残す東浦賀の護岸
(2021.7.21筆者撮影)

と割石の間隔が広く目地にはセメントモルタルが施されている。長さは東渡船場近くまでの数百メートルはあろう。目地内部の練土までは確認できなかったが、人造石の可能性も窺われ、今後の調査確認が要される場所である。

このほか、浦賀湾を挟んだ東浦賀の浦賀湾入口辺りの護岸及び、西浦賀の浦賀燈明堂まで足を運んで石垣護岸を探索したが、人造石らしき護岸は見つけられなかった。

5. おわりに

服部長七の人造石工法による大規模土木工事は、愛知県をはじめ西日本で多く施工され、その遺産も比較的よく残っている。しかし関東以北で現存するのは新潟県佐渡市の佐渡鉱山関連施設のみである。東京では、述べたように 1880 年代前後から 1990 年代にかけて、長七たたきを主にした小規模工事が行われてきたが遺構は未発見である。こうした中、関東地区の一角を占め、記録にも残る浦賀をはじめ横須賀地区の調査は、まだ緒に就いた段階ではあるが、楽しみな地域となっている。

最後になったが、本調査では多くの方にお世話になった。お名前は伏せさせて頂くが、横須賀市教育委員会文化財係、住友重機械工業株式会社横須賀製造所、東京大学大学院人文社会系研究科、東京文化財研究所、国立科学博物館の方々である。心より御礼を申し上げます。

【文献】

- (1)天野武弘、犬塚将英、中山俊介、紀芝蓮、寺島海「浦賀ドックの人造石遺産—浦賀ドックから採取された目地材のX線分析結果と考察—」『産業遺産学会 2024 総会予稿集』2024 年 6 月、2 ~ 5 頁。
- (2)西澤泰彦「明治時代に建設された日本のドライドックに関する研究」『土木史研究』第 19 号、1995 年 5 月、147 ~ 158 頁。
- (3)『浦賀船渠六十年史』浦賀船渠株式会社、1957 年 6 月。
- (4)「岡田煉瓦 100 年史」編集委員会編『岡田煉瓦 100 年史』株式会社岡田煉瓦製造所、1997 年 11 月。
- (5)犬塚将英、高橋佳久、紀芝蓮、中山俊介、中村舞、建石徹、鈴木美和、斉藤進、天野武弘「高輪築堤から採取された目地資料の分析調査」『保存科学』第 62 号、東京文化財研究所、2023 年 3 月、73 ~ 83 頁。

第185回定例研究会の概要

大島 一朗 / OHSHIMA, Ichiro

日時：2024年11月17日（日）13:00～17:00

会場：名古屋市市民活動推進センター

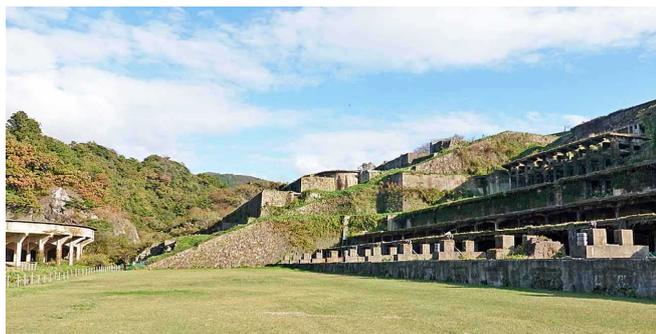
参加：16名

司会：山田 貢 記録：大島一朗

1. 研究報告、調査報告

[185-11-01] 「世界遺産・佐渡の鉱山は近代化遺産も見どころいっぱいー人造石遺産、機械遺産を中心にー」 / 天野武弘

佐渡島には、世界遺産「佐渡島の金山」の登録外とはなっているが、近代の産業遺産が数多く存在する。その中心は明治になってから開発、建設された鉱山の各施設である。大立堅坑櫓、道遊抗、高任抗、採掘した鉱石を処理する高任粗砕場、間ノ山搗鉱場、間ノ山アーチ橋、旧北沢青化浮選鉱場、北沢浮遊鉱場、50mシクナー、鉱石や石炭、物資の搬出入に利用された大間港、少し離れているが戸地川第二発電所などが、世界遺産に匹敵する姿で残っている。そして削岩機の先端部のタガネの修理などを行った工作機械が沢山並んだ機械工場もある。近代の鉱山遺産が目白押しの佐渡島は、見どころ満載であることを報告した。



西側より見る北沢地区の旧北沢青化・浮選鉱所

(2023/11/08 天野武弘撮影)

[185-11-02] 「ドイツの保存鉄道・ハルツ狭軌鉄道 (Harzer Schmalspurbahnen) について」 / 石田正治、オリバー・マイヤー

ドイツには、蒸気機関車の運転による保存鉄道がドイツ国内各地にあるが、その中で、路線延長が最も長く、しかも毎日、蒸気機関車による運行がなされているハルツ狭軌鉄道(ドイツ語:Harzer Schmalspurbahnen) またはHSB)について、その歴史と運行状況、機関車修理工場の機関車分解整備の様子について報告した。



ヴェルニゲローデ駅のタンク式機関車

(2019/08/27 石田正治撮影)

ハルツ狭軌鉄道は、軌間1,000 mm (メートルゲージ) の狭軌鉄道である。ドイツ中部(旧東ドイツ、正式にはドイツ民主共和国)のハルツ山地にある狭軌鉄道網で、HSBは、第二次世界大戦後に以前の2つの鉄道会社の合併として設立された。約140キロメートル(86マイル)の路線を所有しており、ヴェルニゲローデ、ノルトハウゼン、クヴェードリンブルクの主要な町と、この地域のいくつかの小さな町を結んでいる。

2. その他諸報告、保存問題など

[185-21-01] 博物館紹介「恵那市明智町にある日本大正村を歩く」 / 寺沢安正

第19回パネル展で作成した「大正浪漫の里を歩くー恵那市明智町の「日本大正村」ー」パネルに関連して、1998年に開村した「日本大正村」の歴史と村内の観光施設と産業遺産について紹介した。



大正浪漫亭 (2024/11/06 寺沢安正撮影)

[185-21-02] 「加悦鉄道4号蒸気機関車、解体の危機からクラウドファンディングで保存へ」／山田貢

加悦鉄道4号蒸気機関車は千葉県にある「ポッポの丘」への移設にむけ、クラウドファンディングによって目標金額、7,000,000円に対して総額 9,714,000円の支援を得た。2024年12月1日より「ポッポの丘」で公開された。

加悦鉄道4号蒸気機関車(0-6-0タンク機関車)は河東鉄道(現長野電鉄)3号機として1921(大正10)年、川崎造船所兵庫工場で新製された。1934(昭和9)年、加悦鉄道へ譲渡され4号蒸気機関車となった。1967年:休車、1969年:廃車後、「加悦SL広場」で静態保存され、2003年、旧加悦鉄道車両群として与謝野町指定文化財に指定された。「加悦SL広場」は2020年3月に閉園となった。

[185-22-02] トピックス(産業遺産に関する話題・近況など)

・「STATION Ai」オープン、あいち創業館について／石田正治、浅野伸一

愛知県の創業者・企業家を紹介した施設で、ベンチャーにも役立つヒントがある。ここで採り上げられた企業家は『ものづくり中部の革新者』とも重なっており、訪問をお勧めする。

・「旧時発電所保存展示施設」／浅野伸一

1921(大正10)年稼働。イビデン創業者と関連し同社が保存してきた。現在水路が損傷しているが貴重な遺産である。

・名古屋城発掘にともなう三和土遺構の現状／天野武弘

二の丸庭園内に多く発見され、^{たたく}三和土の宝庫でもある。

・明治村23号(旧12号)蒸気機関車オリジナルボイラの現状／橋本英樹

1874(明治7)年シャープ・ステュアート製オリジナルボイラは、1985(昭和60)年に現在のボイラに換装された後、村内に野外展示中。だが、損傷が激しくなってきた。

・松重開門一般公開に参加／オリバー・マイヤー

面白い、見たことがないという反響が多く、産業遺産への関心が高いことが示された。なお、ポンプ室は4月から運転休止。

3. 研究誌、会報(研究会ニュースレター)

[185-31-01] 研究誌『産業遺産研究第32号』の編集について／石田正治

査読論文:4月15日投稿申込、4月30日原稿締切、

その他の諸原稿:5月31日締切。
積極的な投稿をお願いしたい。

[185-31-02] 会報ニュースレター 電子メール版について／橋本英樹

1ヵ月以上事務局連絡やニュースレターがメールで届かない場合は、連絡してほしい。

4. シンポジウム・パネル展・その他事業

[185-41-01] シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第41回の報告／赤崎真紀子、八田健一郎

テーマ:『愛知独自の“発酵食文化”を支えるものづくり』

開催日:2024年10月19日(土) 13:00~

会場:名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス

「伝統と革新」がテーマ。食産業の一分野である発酵だが、愛知県は日本一といわれている。シンポジウムの各発表・報告内容は多岐にわたり、異分野交流を推進し発酵文化をインバウンドや観光につなげる好機となった。102名が参加、アンケート回答51名で好意的な内容が多く、技術士会の参加者からも新鮮な意見を頂戴した。事前準備の課題はあったものの今後しっかり総括したい。

[185-41-02] パネル展と講演会／渡辺治男

テーマ「大正ロマン、昭和ロマンのモノがたり一消え去った風景、忘れられた施設」

パネル展:2025年1月28日-2月16日

会場:名古屋都市センター11階まちづくり広場

講演会:2025年2月9日(日)午後

会場:まちづくり広場のホール

第1回勉強会:9月15日13:30~

名古屋都市センター13階会議スペース

10月27日、11月24日、12月22日にも実施するので参加してほしい。講演は水道、テレビ塔、愛岐トンネルで決定。

[185-41-03] 30周年記念事業委員会

・30周年記念誌編集を終えて／天野武弘

執筆者50名、原稿70本、うち「私と産業遺産」は35名から原稿を頂戴した、改めて御礼したい。

あと60部あるので、販売にもアピールしてほしい。

・デジタルアーカイブの作成／石田正治

クラウドサービスにより研究会データをPDFデータ化検討中。

[185-41-06] WEBサイトの運営と管理／岩井章真
特になし。WEBサイトは随時更新。

5. 見学会、その他の催し物 案内

[185-51-01] なし

6. 文献紹介、資料紹介 ()内は紹介者

【参考文献】

[185-61-01] なし

【参考資料】

[185-61-02] なし

【その他の資料】

[185-61-03] 「KINIAS ニュースレター」近畿産業考古学会

[185-61-04] 「ニュースレター」東京産業遺産学会

[185-61-05] 「九州産業考古学会報」九州産業考古学会

7. その他の出版広報事業

[185-71-01] なし

8. 役員会等

[185-81-01] 幹事会・役員会等／事務局

・必要の都度メールで実施

定例会・見学、シンポジウム、パネル展と講演会、など

9. 事務局関係

[185-91-01] 会員異動（前回の定例研究会以降）／事務局

入会（敬称略）：伊藤 勲(2024/9/28)

退会（敬称略）：坪井珍彦(2024/9/13ご逝去)

[185-91-02] 2024年度会費納入のお願い／事務局

納入口座について、本会報11ページ参照。

問合せ窓口

会計担当 加藤真司：ssmkatou@hm9.aitai.ne.jp

重複支払など会費支払について不明な点があれば、上記宛メール問い合わせしてほしい。

[185-91-03] 書籍・資料等交換会／事務局

会員の不用になった関連書籍や資料を希望者へ引き継ぎます。

[185-91-04] 研究会スケジュール、関連団体スケジュール、他／事務局

2025年

01/26（日）13：00～ 第186回定例研究会 とよた市民活動センター

01/28～02/16 パネル展・講演会 名古屋都市センターまちづくり広場

02/09（日）13：00～ 講演会 名古屋都市センターまちづくり広場ホール

03/25（火）見学会

大井発電所が見学会の候補。ただし、公共交通によるアクセスに難があり、継続検討中。

※本会報11頁の見学会案内参照。

第19回パネル展 大正ロマン、昭和レトロのモノがたり II —消え去った風景、忘れられた施設— 案内

かつてどこにでも見られたけれど、気が付くとなくなってしまった大正・昭和の風景や産業遺産を取り上げてパネルで紹介します。これらのモノや風景と一緒に、私たちは、かつての昭和、大正時代にあったぬくもりや人とのつながりなど大切なものも捨て去ったかもしれません。懐かしい街の風景や大正・昭和の暮らしから、便利になりすぎた現代の生活を見直し、今に活かしたい。

主催：中部産業遺産研究会

共催：公益財団法人 名古屋まちづくり公社
名古屋都市センター

後援：愛知県教育委員会、名古屋市、
名古屋市教育委員会

助成：公益財団法人大幸財団

■パネル展 入場無料

開催日：2025年1月28日（火）～2月16日（日）

休館日：2月3日（月）、2月10日（月）

会場：名古屋都市センター 11階、まちづくり広場

パネル展示：

I 街の風景

名古屋水道の歴史、名古屋テレビ塔、名古屋駅界限、聚楽園大仏、大井発電所、名古屋港跳上橋、運河のデリック、木炭自動車、トンネル内のナトリウムランプ、武豊港の転車台など

II 仕事の風景

そろばん、電卓、計算機、発動機と耕耘機、養蚕と製糸、自動織機、軍手、エレベータガールなど

III 暮らしの風景

真空管、テープレコーダー、名古屋放送局、自動電気釜、ツルレコード、電気の家など

IV 大正ロマン、昭和レトロの博物館

ブラザーミュージアム、大正村、依佐美送信所記念館、高柳記念未来技術創造館

■講演会 入場無料

開催日：2025年2月9日（日）13:00~16:30

会場：名古屋都市センター11階
まちづくり広場内ホール

講演内容：

- ・「水でたどる名古屋の歴史」／馬淵幸男氏（元名古屋市職員）
- ・「戦後復興のシンボルとなった名古屋テレビ等」／大澤和宏氏（名古屋テレビ塔（株）社長、中部産業遺産研究会会員）
- ・「昭和の汽車旅と愛岐トンネル群の保存と活用」／山田 貢氏（中部産業遺産研究会会員）

■会場へのアクセス

JR・名鉄・地下鉄名城線「金山総合駅」南口から徒歩1分

■問い合わせ先

中部産業遺産研究会 パネル展幹事 渡辺治男
メール daphne597388@ybb.ne.jp

■計算尺・手回し計算器の使用体験

会期中、随時、会場で計算尺と手回し計算器の使用体験ができます。

『産業遺産研究』第32号の原稿募集

『産業遺産研究』編集委員会

石田正治／ISHIDA, Shoji

『産業遺産研究』第32号の編集と原稿の投稿期限

(1) 査読論文等（論文、調査報告、研究ノート）

- ・投稿申し込み 2025年4月15日まで
タイトルと概要（200字程度）を石田正治（ishida96@tcp-ip.or.jp）宛て連絡。
- ・投稿原稿提出期限：2025年4月30日（水）

執筆要綱、投稿要領を参照の上、原稿を作成して

ください。

4月30日以降の投稿原稿の修正は、査読が終了するまでできません。

・編集スケジュール

- 4月30日（水） 原稿受け付け終了
- 5月7日（水）～6月4日（水） 査読期間
- 6月10日（火） 査読結果の通知
- 6月30日（月） 修正原稿提出期限
- 7月5日（土） 著者校正期限
- 7月10日（木） 版下原稿、印刷所に送付
- 7月20日（日） 発行予定
(定例研究会7/27)

(2) 査読論文等以外の諸原稿

- ・投稿原稿提出期限 5月31日（土）
5月31日（土）～6月20日（金） 編集期間
- 6月30日（月） 著者校正期限
- 7月10日（木） 版下原稿、印刷所に送付
- 7月20日（日） 発行予定
- ・投稿宛先 石田正治 ishida96@tcp-ip.or.jp
〒440-0093 愛知県豊橋市横須賀町元屋敷14-2

第186回定例研究会 案内

期 日：2025年1月26日（日）13：00～17：00

会 場：とよた市民活動センター

豊田市若宮町1丁目57番地1 T-FACE A館9階
アクセス：名鉄三河線・豊田市駅下車、西口を出てすぐ。愛知環状鉄道・新豊田駅下車、徒歩3分。

研究報告：

1. 大島一朗 『産業遺産の多面的価値分析』手法の紹介と石見銀山の明治期坑内軌道跡での分析例
2. オリバー・マイヤー 「ルール地方の保存された製鉄所 —Landschaftspark Duisburg-Nord und Henrichshütte Hattingen—」

他、諸報告あり。

※定例研究会での報告を希望される方は下記事務局担当宛ご連絡ください。

- 夏目勝之 <ec79helvetia@na.commufa.jp>
- 山田 貢 <yamada202102@gmail.com>

第187回定例研究会 案内

期 日：2025年3月23日（日）13：00～17：00

会 場：とよた市民活動センター

豊田市若宮町1丁目57番地1 T-FACE A館9階

アクセス：名鉄三河線・豊田市駅下車、西口を出てすぐ。愛知環状鉄道・新豊田駅下車、徒歩3分。

※定例研究会での報告を希望される方は下記事務局担当宛ご連絡ください。

夏目勝之 <ec79helvetia@na.commufa.jp>

山田 貢 <yamada202102@gmail.com>

大井発電所・北恵那鉄道廃線跡 見学会案内

見学場所：大井発電所（岐阜県中津川市蛭川）および同ダム、北恵那鉄道廃線遺構など

開催日時：2025年3月25日（火）

9時（名古屋・金山発）～18時30分頃（金山着）

交通：マイクロバス利用（定員27人限定）

集合場所：名古屋 金山駅北口、アスナル金山から西方向の19号線

参加費：6000円（昼食代含む）

解 説：大井発電所については関西電力様、北恵那鉄道跡については田口憲一会員から説明があります。

参加申込先：浅野伸一

〒464-0042 名古屋市千種区南ヶ丘1-7-70

TEL 090-8134-5247

PCメールs-asano417@rapid.ocn.ne.jp

その他、詳細は案内チラシをご覧ください。

2024年度年会費ご入金のご案内

1. 年会費 4,000円

2. 振替、振込口座 ゆうちょ銀行

■ゆうちょ銀行より振替

□座番号 00810-9-138886

□座名 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキウウカイ

■他銀行からの振込

ゆうちょ銀行 ○八九店

当座預金 138886

□座名 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキウウカイ

※ 2023 年度年会費、未納の方は、合わせてお振り込み下さい。

■編集後記、原稿募集

■編集後記

パネル展のパネルの編集と重なり、この会報の発行が大幅に遅れました。その第19回パネル展は、1月28日（火）から名古屋市都市センター、まちづくり広場にて開催です。名古屋にお出かけの折は、会場にお立ち寄りください。

また3月25日には、春の見学会が予定されています。こちらにもご都合よければお出かけください。

天野武弘会員の人造石の産業遺産めぐりシリーズは、再開です。（石田）

■産業遺産に関する諸情報、短信、文献紹介、ご意見などお気軽にご投稿下さい。投稿は郵送または電子メールでお送り下さい。写真には必ず撮影者と撮影日時を記載したメモを貼り付けて下さい。

原稿送付先：石田正治 ishida96@tcp-ip.or.jp

第98号の原稿締切日：2025/03/15

■「中部産業遺産研究会会報」発行予定

第98号（2025/04/15） 第99号（2025/07/15）

第100号（2025/10/15） 第101号（2026/01/15）



中部産遺研会報 第97号

ISSN 2189-5619

Newsletter of The Chubu Society For The Industrial Heritage Vol.97

発行日：2025年01月20日

編集委員：石田正治・橋本英樹・山田貢・大橋公雄・浅野伸一・朝井佐智子・夏目勝之

中部産業遺産研究会事務局：

〒463-0088 名古屋市守山区鳥神町194 山田 貢 方

中部産業遺産研究会のホームページ <https://csih.sakura.ne.jp/>

掲載記事の無断転載を禁じます。

Copyright 2024, The Chubu Society For The Industrial Heritage, All rights reserved.